The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1950～60年代の障害者コロニーにおける「ものづくり」と空間の構築 ： 「あざみ織」の事例を中心に
Author(s)	飯守, 桂一
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 61-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1950～60年代の障害者コロニーにおける「ものづくり」と空間の構築

――「あざみ織」の事例を中心に――

飯　守　桂　一

はじめに
１．糸賀一雄のコロニー構想とあざみ寮の設立
２．あざみ織の確立と施設空間の再編
３．障害者コロニーにおける「ものづくり」の意味
おわりに

はじめに

障害のある人びとの「アート」や「クラフト」は社会に浸透しつつある。そして近年では、福祉施設における「ものづくり」[1)]への関心の高まりにより、これらを取り上げた出版物や作品展なども増えている[2)]。障害のある人びとによって作られた「もの」が日本で初めて注目されたのは、遡れば昭和10年代に開催された知的障害児施設「八幡学園」児童の作品展が始まりであったといえる。この展覧会では絵画や木工などの作品が展示され、特に当時16歳の山下清（1922－1971）の貼絵や絵画が注目を集め話題となった。そしてこれら児童の作品は、施設における教育の一環としての「ものづくり」によって生み出されたものであった[3)]。八幡学園では絵画、書道、木竹細工、紙細工、布細工、ミシン、裁縫などの「もの」を作る作業を通じた教育が重視されていたが、これらの「ものづくり」は同時代の他の障害者福祉施設によっても教育実践として重視されていたといえる[4)]。

また戦後には、糸賀一雄のコロニー構想によりいくつもの先駆的な「コロニー」[5)]がつくられ、生産教育・職業指導の一環として手製によるものづくりが行われた。これらのコロニーでは窯業をはじめ、織物、木工などのものづくりが展開されたが特に窯業は、日本における新しい陶芸確立の先駆者として著名な八木一夫（1918－1979）が深く関わったことにより芸術の領域まで発展を遂げた。このため、これらコロニーのものづくりは窯業を中心に注目されてきたといえる。しかし近年、福祉施設では「さをり織」という比較的簡易な機織りが普及したこともあって、「アート」や「クラフト」としての織物への関心

が高まりつつある。さらにこれら「ものづくり」への関心は、障害のある人びとが作った「もの」だけに留まらず、ものづくりが展開される施設空間にも目が向けられている。

このように近年では福祉施設による織物作業や、ものづくりが行われる施設空間への注目が集まりつつあるといえるが、施設におけるものづくりやその歴史に着目した研究は非常に少ない。先行研究には滋賀県の福祉施設による作陶の歴史を取り上げたものとして大槻倫子の研究（大槻1993、2009）があげられるが、戦後のコロニーの織物作業に焦点を当てたものはないといえる。また、滋賀県のコロニーに関する研究としては、障害児教育史の視点から糸賀一雄のコロニー構想を取り上げた清水寛の研究（清水1981）や、最近では糸賀一雄の人物史研究の一環として糸賀の昭和20年代における知的障害観とコロニー構想に着目した蜂谷俊隆の研究（蜂谷2012）があるが、戦後の施設空間とものづくりの相関を取り上げたものはない。しかし、ものづくりという視点ではないが、知的障害者施設の「建築計画史的研究」として、津曲裕次による明治期の施設の建築計画を検討した研究（津曲2008a、2008b）があり、本論文における施設空間の構築というテーマは津曲の研究から着想を得た。

これらの先行研究をふまえて本論文では、戦後の滋賀県において糸賀一雄のコロニー構想によってつくられた施設の中で、1950年代に織物を先駆的に導入した「あざみ寮」に着目し、そこで展開された織物作業を事例として取り上げた。あざみ寮では当時のコロニーに対する社会的ニーズでもある「職業生活者としての自立」を目指し、職業指導・生活指導の一環として織物作業が展開されてきた。

以下、本論文では1950年代から60年代における「あざみ寮」の織物作業と施設空間の関係を中心に、施設空間構築にものづくりがどのように関与したのか考察を試みた。第1節ではあざみ寮が設立した背景として、創設者である糸賀一雄の1950年代のコロニー構想を概観し、あざみ寮の概要を述べた。第2節ではあざみ寮における織物作業の歴史を概観し、施設空間構築の過程として、戦後の社会状況により限られた財源の中で既存の建物を転用することで施設空間を獲得し、その後居住空間と作業空間が如何に分離したかを述べた。第3節では施設空間とものづくりの相関について検討し、施設空間で行われるものづくりの意味について考察を試みた。設立当初のあざみ寮の限られた空間では居住空間と作業空間は未分離であり、規律や生活サイクルを生みだすためには作業空間を構築することが重要であった。あざみ寮では織物作業を導入することで作業空間の構築を促進し、また「あざみ織」の発展にともない居住空間と分離した織物工房が設立され、生活圏の拡大や施設生活に変化が生じた。そしてこの独立した作業空間は、当時の社会的要請である「職業自立」に応えるための保護・永住とも結びつく「職業空間」として構築され、ものづくりを通じた新たな障害者コロニー像が生み出された。このように「ものづくり」は空間を

獲得・構築する上で有用であり、また社会的要請に応える媒体としても重要な役割を担ったことを明らかにした。

なお本論文で「知的障害」を表す言葉として、「精神薄弱」という用語を歴史的表現として当時のまま使用した。

1．糸賀一雄のコロニー構想とあざみ寮の設立

戦後の知的障害者福祉の先駆者として知られる糸賀一雄（1914－1968）は、戦時中滋賀県庁の要職を歴任した後、1946年に教育者の池田太郎（1908－1987）、田村一二（1909－1995）とともに滋賀県大津市に近江学園を設立し、戦後「浮浪児」として放置されていた戦災孤児や、家庭や地域で見放された知的障害児を収容保護して教育する活動を展開した。近江学園による教育実践は、「物を創ることを通しての全人格的教育を生産教育と呼び」、生活・学習・生産の一元化をはかった取り組みが行われてきた（『近江学園創立50周年記念誌』編集委員会1996：119）。それは「教育的であってしかも営利的であるような各種の生産現場を用意して学園の自立自営をはかる」ことを目指すものでもあった（糸賀1965：109）。

1950年代初期の糸賀のコロニー構想は、職業的な自立に向けての拠点となるものであり、「社会への橋渡し」を目指すものであったが、この構想の根底には障害児の年長化問題における対策として「アフターケア」施設を整備する意図あった。1948年に施行された児童福祉法により、近江学園などの精神薄弱児施設が規定されたが、適応範囲が18歳未満であること、そして独立自活に必要な知識技能を与えるという目的規定が設けられていた。これはつまり児童福祉法が対象とする18歳までに独立自活を果たし、施策が終結する体裁を整えなければならなかったことを意味した（蜂谷2012：107）。これより糸賀は1950年代に年長児のための「アフターケア」施設として、窯業コロニーの信楽寮（1952年）、女子のためのコロニーとしてあざみ寮（1953年）、農業コロニーの日向弘済学園（1953年）を設立していった[6)]。これらのコロニーは法整備の不備により、公的な支援がほとんど得られない中で設立された。糸賀はこれらのコロニーを通じて障害のある人びとの生活保障の問題を普遍化し、公的な支援を引き出そうとしていたことがうかがえる（三浦1996：77-8、蜂谷2012：105）。

この糸賀のコロニー構想により、あざみ寮は年長女子と年少児を対象とした女子のための職業指導施設として、1953年に糸賀の私塾という個人経営の形で開設された[7)]。開設にあたって糸賀は「あざみ寮要覧」の沿革で次のように述べている。

従来、精神薄弱児のうち特に女児については、各種の事情のため、その将来の社会

的自立を考えることが困難であるとされて、その対策も常に後まわしにされる傾向にあり、成人しても社会的負担のまま放置されるという有様であった。また一方、精神薄弱な幼児については、精神医学と臨床心理学が早期発見に成功しても、その収容保護に当る社会的施設の貧困が訴えられて来た。あざみ寮はこれら二点の問題の解決を念願してささやかな一つの試みとして発足したものである。（糸賀1953a：227）

糸賀はこのあざみ寮の設立によって、法律の一つの壁である「18歳問題」という児童福祉法による年齢制限をクリアしたいと考えていた。近江学園における大集団の生活空間の中では、年長女子への家庭的技術の訓練や指導は困難であり、職業技術の指導にも難点があった。これに加えて、過去に近江学園で生活していた女子が18歳で養母に引きとられるとすぐに遊廓で働かされ、そこを逃げ出して学園に救いを求めて帰ってきたという事件[8)]があり、このとき糸賀は法律の不備による18歳以上の障害のある女子の問題を痛感させられた（糸賀1953b：262-3）。このように、近江学園において派生した成人問題や障害のある女子をめぐる問題の解決を試みるべく設立されたあざみ寮は、職業指導を行う教育の場であると同時に知的障害のある女子たちの保護を目的とした空間でもあった。

あざみ寮が開設した一年目は、近江学園からの「職業委託生」が初めに寮へ移り住み、その後一般家庭からも「一般委託生」という形で多くの女子が移り住むこととなった（図版１）。この「職業委託生」は、近江学園による年長女子のために編成された「あざみ組」のクラスで職業指導や生活訓練を受けた女子たちであり、親のいない子供や貧困家庭の子供たちが多く含まれていた。一方「一般委託生」は、一般家庭から直接に自由契約で入寮する女子たちであり、その多くは裕福な家庭の子供たちであったという。糸賀によれば、この「自由契約の人たち」は精神薄弱児育成会（手をつなぐ親の会）の斡旋により全国から次々に送りこまれてくる状態で、常に入寮待ちの何十名もの待機者が控えていたという（糸賀1963、1965）。精神薄弱児育成会は運動目標として障害のある児童への義務教育の実現を目指していたことから、就学免除された人びとのニーズに応えるために一般家庭からあざみ寮への斡旋が行われていたと考えられる[9)]。

1950年代から60年代にかけてのあざみ寮の入寮者は三つのグループに分けることができる。上記の「職業委託生」、「一般委託生」、そして生活保護の適用を受けていたグループである。二代目寮長の三浦了はこの三つのグループについて次のように説明している。

「職業委託生」に関しては、近江学園分校の中学を卒業する年代の人たちの中で、「近い将来社会的自立を目指したい人たち」のために、「生活と職業」を中心とした指導を専門に受ける「職業指導委託生」として常に14名があざみ寮に在籍していた。「この委託生のうちの一人が就職等で施設を出ていくと替わりの人が近江学園から入って」くるという「制

度」であった。

「一般委託生」に関しては、一般家庭からの「自由契約の人たち」であった。「当時女子のみのこの種の施設は全国的にもここあざみ寮だけであったということ[10]、糸賀園長を中心とした近江学園での先取的な営みがあまりにもよく知られていたということ、あざみ寮はその分身であるということ等々で、日本の各地からの入寮相談がとぎれることがないほどであった。この状態はあざみ寮が自由契約としての施設を廃止するまで続いた」という。

生活保護の適用を受けていたグループに関しては、「近江学園で18歳を超えたが、行く先の定まらない女性」、「障害が大変重くて、あるいは他の病気などがあったりして、就職はとうていむずかしく、しかも、引き取れる家庭が貧困その他で不可能に近いような人。その人を引き取ることによって、家庭崩壊をきたしてしまうような家庭の人たち」であった（三浦1996：78）。

また寮生の人数についてはあざみ寮寮生の移動統計をみると、昭和28（1953）年度の入寮者は「近江学園委託生（職業委託生）」が12名、「一般委託生」15名、「生活保護その他」の入寮者が1名の計28名であり、退寮者は「近江学園委託生」1名と記されている。その後「一般委託生」の入寮者が増加し、昭和36年（1961）には寮生の構成は「一般委託生」が40名以上に達し、「近江学園委託生」と合わせると50名以上とほぼピークの状態となっている[11]（社会福祉法人大木会1963：27）。そしてこの「一般委託生」として入寮した人びとの中には、現在もあざみ寮（現名称は「社会福祉法人大木会　もみじ・あざみ」）で生活する人びともいることから、当時の「一般委託生」には、長期の入所もしくは永住を目的として移り住んだ人びとも少なくなかったと考えられる。

2．あざみ織の確立と施設空間の再編

あざみ寮では開設当初、寮内に設けられていた編物研究所[12]の先生の指導のもとで機械編の稽古が始められ、近江学園の家族舎からの注文を受けることにより製品化も念頭に置いた織物作業が行われていた。また、機械編の作業が困難な寮生に対しては、手編みの練習、ミシン（図版２）、ほどき物、雑巾刺し、着物の仕立、通い女中等、能力に応じた仕事を与えていたという[13]（林1953：272-3）。

また糸賀はあざみ寮での職業指導として織物に着目したことについて以下のように述べている。

> 織物は、もともと女の子たちにとって、昔からの伝統と実益という魅力をもった、興味ある教材となるものであった。理屈はともかく、ひとつには、私は、織物、特に手でつくる織物の味にひかれていたし、なんとなく、そういう仕事はこの娘たちに向

いているという感じをいだいていたのである（糸賀1963：53）。

このように織物は女性にとって伝統的な仕事であり、あざみ寮の彼女たちも手づくりによるものづくりの仕事は向いているという糸賀の織物作業に対する見解が見て取れる。そして糸賀によると、1957年頃からあざみ寮では織物科を設立して織物作業を本格的に展開する計画が進められたという。また糸賀は、このあざみ寮の織物作業を「民芸」という位置づけで展開しようとしていたといえる[14]。織物科をつくるために糸賀は、民芸運動の一端を担った倉敷民藝館の当時館長であった外村吉之介（1898－1993）に相談をもちかけた。そして外村があざみ寮を視察した際[15]、能力差の大きい彼女たちが毛糸の手編み仕事に対して「各自の能力に応じて、じっと座り根気よく手を動かして、同じことのくりかえしをあかずにやって」いたことを目にした外村は、彼女たちにはホームスパン作業[16]が適しているとの助言を与えたという（山崎・石原1959：45）。そして1957年7月末、外村の紹介により、東京でホームスパンを実際に業とし、後に日本民藝館展の審査委員を務める清野（白井）新之助があざみ寮に迎えられた。これを機に、以後あざみ寮では織物作業が本格的に導入されていく[17]。このようにあざみ寮の織物科は、民芸に関係をもつ専門家の指導を受けてスタートしたといえる[18]。その後この織物作業は「あざみ織」[19]と命名され、頒布会制を導入するなど発展を遂げる。そしてあざみ織の発展とともにあざみ寮の施設空間も再編されていく。

あざみ寮の施設空間は当時新築されたものではなく、もとは大津市真西町（現・長等一丁目）にある長等山荘[20]という延150坪の建物を転用したものであった（図版３）。長等山荘があざみ寮として使用される前は、桜沢如一（1893－1966）[21]が食養のための研究所「無双原理講究所」として所有していた[22]。そして桜沢が、「糸賀一雄が精神薄弱の女子の児童と成人とを一貫した施設を開設するのであれば、糸賀にこの土地と建物を無償でさしあげよう」と糸賀一雄個人への無償提供を申し出たことより（三浦2004a：206）、糸賀は私財の50数万円と政府との折衝で得た補償金50万円を改修費にあて、あざみ寮の施設空間が完成する[23]。当時のあざみ寮の平面図は現在のところ見つかっていないが、「あざみ寮要覧」には間取りとして、「児童室が十二畳（一間）、十畳（一間）、八畳（二間）、六畳（一間）、四・五畳（三間）、作業室が二十七畳（一間）、十四畳（板敷）」と記されている[24]（糸賀1953a：228）。

1950年代から60年代の初めにかけてのあざみ寮の織物作業は、食堂を兼用するなどあざみ寮の居住空間の一部を作業空間として使用していた。石原によると、当時はとても作業室と呼べるようなものではなく、部屋に機（はた）を二台入れると廊下にまではみ出してしまう程であったという。しかし機（はた）を入れただけの空間であっても、その部屋での作業を織物作

業と呼ぶことで作業場らしく思えたという（石原1984：53）。そして織物作業が軌道にのるにつれて新たに六十坪ほどの工房を作る計画が持ち上がり[25]、1964年に「あざみ寮工房」（図版12～16）があざみ寮の近隣である大津市長等山に建設される。これにより一つの独立した作業空間があざみ寮に誕生し、あざみ寮の施設空間ならびに寮生の生活圏は拡大する。

この織物工房の設立により、あざみ寮では二つの変化がもたらされたといえる。一つは施設空間の再編であった。これまで一つの居室が多様な目的で使用されていたが、工房ができたことで施設空間の分化が促され、施設内で行われる活動が高度なものとなっていった。工房の建設により作業空間が整備されたことで、織物作業はより高いクォリティが求められ、寮生の織物作業に対する意識の変化を導くこととなった。そして織物作業の水準が向上し、あざみ織が発展を遂げることで、工房は従来の施設内における仕事場としてではなく、社会の中における仕事場としての地位の確立が目指された。この織物工房の設立は、施設空間における作業空間と居住空間の分離という新たな空間のありかたや生活スタイルを示すことにもつながったといえるだろう。

この施設空間の新しい生活スタイルの構築とも関連して、工房の設立により生じたもう一つの変化として、寮生の生活空間での移動があげられる。工房へは徒歩で移動し、寮生たちはあざみ寮と工房を行き来する移動空間を獲得することで生活圏の拡大が生じた。そしてこの移動空間は、寮生と地域住民の交流の場となり得る空間であり、寮生にとって多様性をもつ空間となった。この工房という独立した空間と工房への移動空間は、施設と社会との結びつきをもたらす上でも重要な空間であったといえるだろう。

また地域住民との交流という点では、あざみ寮の立地条件（図版４）をみると、あざみ寮は障害者施設としては珍しく利便性の高い場所[26]に位置していたこともあって地域住民との交流が盛んであった[27]。つまりあざみ寮は現在の障害者施設で目指されている地域に開かれた施設であったといえる[28]。しかし寮生の増加[29]と建物の老朽化から、1960年代にはあざみ寮の移転新築の計画が持ち上がる。また60年代の後半は、高度経済成長を背景に全国的に大型コロニー建設の機運が高まっていく時期でもあった。さらに1967年には精神薄弱者福祉法[30]が改正され、「精神薄弱者援護施設」が精神薄弱者更生施設と精神薄弱者授産施設に分かれることになり、これを機にあざみ寮はこれまでの無認可施設から「認可施設」として再出発することになった。そして滋賀県と協議を重ね、あざみ寮は現在地の石部町（現・湖南市石部が丘）に、新たに開設される授産施設もみじ寮（定員50名）と併設するかたちで建て替えられることが決定する[31]。1968年には石部町があざみ寮・もみじ寮建築のために町有地8,500㎡を廉価で分譲し、さらにこの土地に隣接する株式会社日本精工からも約1,650㎡の土地が石部町と同じ単価で分譲される。そして1969年、石部

において新たな施設空間としてあざみ寮・もみじ寮が開設し[32]、現在に至っている。

3．障害者コロニーにおける「ものづくり」の意味

1964年にあざみ寮では織物工房が建設され、織物作業のクォリティは高まっていった。しかしあざみ寮は職業指導施設であって、作品を流通させることが本来の目的ではなかった。職業指導施設としてのあざみ寮の役割は、「あくまでも作業をとおしての寮生の自覚ということであり」、「いいかえれば職業生活の指導、つまり社会性を身につけさせるということ」であった（山崎1961：125、三浦1962：72）。また三浦は、「作業も生活の中の一部である以上、あくまでも生活指導なので」あり、「織物科という組織の中で、ひとりひとりが自分の役割を自覚し、社会人としての人格の形成に役立つような、そのような作業場の雰囲気であり、寮の雰囲気でなければならない。」と述べている（三浦1962：72）。あざみ寮における織物作業は、彼女たちに社会性を身につけさせる役割を担い、施設空間における規律化として機能した。

1950年代から60年代初めにかけての初期のあざみ寮の施設空間は、財源上の制約と法整備の不備により作業空間と居住空間が未分離な状態であった。このため、生活のあらゆる局面が限られた施設空間内で展開される日常生活において、規律と変化をもたらすには多様な空間を生み出すことが重要であった。この点で作業空間をつくることは最も効果的であったといえる。上記のように施設の集団生活の中で社会性を身につけるためには作業を通じた組織化が有用であり、また施設生活での緊張と解放の生活サイクルを生み出す上でも、緊張を得る場としての作業空間が必要であった。そしてあざみ寮の場合は織物作業を導入することで作業空間を生み出すことに成功したといえる。織物作業に用いる機（はた）は持ち運びが可能という点で空間を固定的に占有せず、旅館型の建物でも使用が可能であった。また先に述べたように、どのような空間であっても織物作業として機（はた）を入れることで作業空間の構築が可能となり、寮生の織物作業に対する意識も高められた。そして織物作業が軌道に乗って成果があらわれたことにより、ものづくりのための空間として居住空間から分離した工房が生み出された。このようにあざみ寮の事例をみると、織物作業を導入し作業空間を構築することで施設空間の多様化が促進されたといえる。さらに織物作業の発展にともない、工房という独立した作業空間の獲得によって施設生活に変化がもたらされた。そしてこの工房の設立や頒布会への展開といったあざみ織の発展は、「あざみ寮という閉じられた社会の窓を開く役割」（糸賀1963：80）として期待され、1969年からはあざみ寮生の作品展示即売会が東京で開催されるなどものづくりを通じた社会化が目指されていった（図版17・18）。

このように施設空間とものづくりは非常に相性が良いものであるといえる。施設空間に

おけるものづくりは、教育実践、職業指導、生活指導の役割を担い、社会性を身につけるためのもの、施設空間に規律を生み出すものとして、また工賃を得るための生産手段として多くの施設で実践されてきた。そして現在では福祉施設による「アート」への注目から「クラフト」や「かわいい雑貨」へと発展し、施設空間におけるものづくりは今もなお受け継がれている。

またあざみ寮の事例にもみられるように、ものづくりは障害のある人びとの生活空間を獲得するための手段であったともいえる。日本社会では、施設空間も含め障害のある人びとが生きていく空間を獲得することは容易でない。日本の障害者福祉の発展は、障害のある人びとの生きる空間を獲得することであったともいえる。あざみ寮では施設空間を構築・再編していく際、限られた財源でいかにして生活空間を獲得していくかが大きな課題であった。土地・建物の提供、財源面における補助、寄付といった援助がなければあざみ寮の施設空間の構築は難しかったといってよい。障害者コロニーがこのような援助を得るためには施設の存在意義を社会に示す必要があり、そのためには施設における活動の実績が重要であった。あざみ寮では織物作業の発展によって成果をあげることで、新たに工房を獲得し、生活空間の拡大を導いた[33]。

また障害者コロニーが社会的承認を得て、空間を獲得し存立するためには社会的要請に応えることが必要であった。日本の障害者福祉施策の歴史の中で、障害者コロニーが日本社会から求められてきたこと、それは「隔離・保護」、「教育」、「職業自立」であったといえる。1930年代から40年代の戦時体制期においては、優生思想にもとづく「隔離・保護」が障害者コロニーへの社会的要請であった。そしてこの状況下でも障害者コロニーではものづくりが行われ、作品展を通じて障害のある人びとの能力が人的資源として役立ち得ることを社会にアピールした。1950年代から60年代の戦後社会と高度経済成長期は、障害の程度や特徴に対応した様々なコロニーの設立が目指された時期であり、あざみ寮のように比較的軽度の障害のある人びとのための施設は「職業自立」が求められていた。しかし「職業自立」を目指した多くの施設では、施設を出て職業的自立を果たした人びとは少数であり、職業指導施設であったあざみ寮も例外ではなかった。また施設を出て就職した人びとにおいても、ものづくりを職業として自立した人びとは少数であった。あざみ寮で一番求人の多かった職種が「女中」であり、他の職種としては農家や商家の手伝い、「看護婦見習い」、ものづくり関連では工員などがあげられる（三浦1963：97）。ものづくりは多くのコロニーで行われていたが、職業としてものづくりが確立されているわけではなかったといえる。

では1950年代から60年代にかけて、コロニーのものづくりは「職業自立」という社会的要請とどのように結びついたのか。それは障害者コロニーによる新たな「職業空間」の

創設であった。この「職業空間」とは、糸賀のいう「調整され得る社会環境」（糸賀1950：147）としての作業空間であり、あざみ寮の事例でいうと織物工房であった。ここでは施設空間を出て実社会で職業的自立を果たすという自立像よりも、施設空間内において職業生活を営むという、いわば施設社会内における新たな自立像が求められた。つまりこの「職業空間」は、ものづくりによって工賃を得る労働の場ではなく、ものづくりの作業と施設の生活とが密接に結びついた新たな保護空間であった。そしてこの保護空間は施設での永住を可能とし、ものづくりと結びついた生活スタイルの構築により施設空間への永住に意味が与えられた[34]。1930年代から40年代はコロニーへの社会的要請の対応として、「隔離」と「保護」のための障害者コロニー像が構築されたが、1950年代から60年代は「保護」と「職業自立」を目指したコロニー像が構築された時期であったといえるだろう[35]。そして、この「職業自立」と結びついた保護空間を構築する上で、コロニーのものづくりは社会へアピールする媒体として適していたといえる。戦時下でも施設による「ものづくり」がアピールされたように、障害のある人びとによって作られた「もの」は、人びとの関心を呼び起こさせる媒体として効果的であったため戦後においても注目された。

またものづくりは障害のある人びとにとっても相性のよいものであったといえる。あざみ織の事例では、外村吉之介があざみ寮を視察した際、寮生が同じことの繰り返しを飽かずにやっていたことからホームスパン作業が適していると考えたように、障害のある人びとの中には、ものづくりに必要な根気のいる繰り返しの作業を得意とする人びとが少なくない。このような障害のある人びとによる繰り返しの作業は、その作業が行われている空間・時間に対する彼ら・彼女らの対処方法とも捉えられる。またあざみ寮の織物作業では、寮生たちが一方的に作業を与えられて受動的に取り組むのとは違い、自らが能動的に作業へ関わっていたといえる[36]。織物作業は彼女たちにとって憧れであり、仕事として役割を得ること、そしてものをつくることはステイタスであるとともに施設で生きるための糧であったように感じられる。筆者が工房を訪れたとき、ひとりの女性が制作途中の機（はた）の前に案内してくれた。そして誇らしげに彼女は自分の作品を見せてくれたことが深く印象に残っている。あざみ寮では寮生たちも自分たちの生きる空間を構築していく存在であったといえるだろう。

障害のある人びとにとって施設空間で生活するということは、その施設空間への「移住」を意味するともいえる。施設へ移り住むことは強制的な「移住」という側面をもつことも否定できないが、それは生きていくための空間を獲得することでもあった。そして彼ら・彼女らが限られた空間に留まり続けながらも、一方で移動をともなう空間のあり方も求められてきた。あざみ寮においてはものづくりを通じた移動が生み出されてきたといえる。60年代に建設された工房は生活空間の拡大と人びとの移動を創出し、地域社会との結び

つきが促進された。また織物作業によってつくられた作品は展覧会を通じてより広く社会へとアピールする媒体となった。このように障害者コロニーのものづくりは空間の獲得と変化を可能にし、移動の契機となったといえるだろう。

おわりに

本論文では1950年代から60年代のあざみ寮における織物作業を事例に、施設空間とそこで行われるものづくりとの相関について考察した。ここで明らかにしたことは、施設空間においてものづくりはユーティリティなものであったこと、そして当時の社会的要請に対するコロニーの応答として、ものづくりを介した新たな施設空間が構築されたことである。あざみ寮の織物作業は生産活動、職業指導、生活指導の役目を果たし、さらに限られた施設空間内に作業空間を構築する役割も担った。また織物作業が発展することで、居住空間から分離した工房という新たな作業空間が獲得され、生活空間の拡大や移動、社会との結びつきが促進された。この独立した作業空間は「職業自立」という社会的要請に応えるための「保護」と「職業自立」とが結びついた新たな保護空間として再編されていった。この保護空間の構築は、施設社会への永住に意味を与え、生活を保障する上でも重要であったといえる。

戦後の日本社会において、障害のある人びとが生きるための空間を獲得することは非常に困難であった。そして彼ら・彼女らが生きるための数少ない選択肢の一つが施設への「移住」であった。しかし施設の絶対数が不足し、施設を設立するにしても法整備の不備と財源不足により、寄付・補助などの財源の援助や建物の転用による財源の節約が不可欠であった。また当時の社会的認識として障害のある人びとの存在や施設の存在が現在より知られていない状況下で施設が存続していくためには、施設の実績や社会的要請に応えることが重要であった。そして障害のある人びとの生活空間確保に向けて施設設立が求められる中で、コロニーではその財源を得るため、また社会に認知されるために様々な啓蒙活動が展開されてきた。この啓蒙活動には、展覧会の開催やドキュメンタリー映画の制作が含まれるが、これらは芸術とコロニーの結びつきを考える上でも示唆的であり今後稿を新たにして取り上げたい。

また今後の課題として、ジェンダーの視点によるコロニーのものづくりの分析が必要である。『近代日本の「手芸」とジェンダー』の中で著者の山崎明子は、「女性は布の労働と多くの場面で結び付けられ、養蚕・製糸・紡績・機織・裁縫などの糸に関わる労働は、女性領域であるとされ」てきたと述べているが（山崎2005：285）、このことはあざみ寮においても例外ではなかったといえる。しかし労働という点に着目すると、あざみ寮の織物作業は厳密には労働と呼べるものではなく、施設における職業指導・生活指導の一環とし

て生活と深く結びついたものであった。日本ではあざみ寮に限らず、男性のみの施設を含む多くの福祉施設において織物、裁縫などの「布と糸に関わる作業」が導入されてきた。しかし男女混合の施設では織物・裁縫は女性の作業として分業化の傾向が見られるなど、今後はジェンダーの視点による施設空間での女性作業の検討が必要である。

また糸賀のコロニー構想の検討にあたっては、蜂谷が指摘するよう糸賀のコロニー構想は時代とともに変容していくため、ある時期を断片的に取り上げるのではなく、各時期によってコロニーがどのような意味づけをされてきたのか検討することが今後の課題として求められる（蜂谷2012：104）。そして1960年代後半から70年代にかけての高度経済成長を背景とした全国的な大型コロニー隆盛の時代に、大型化された施設空間においてものづくりがどのように関与したかについては今後稿を改めて検討したい。

最後に日本の障害者福祉と障害のある人びとの「ものづくり」をめぐる現状について述べると、現在では障害のある人びとへの根強い偏見や差別、法整備の不備や財源不足による脆弱な施設運営、限られた空間の生活といった過去から続く問題を抱えつつも、障害者福祉に対する社会的認識は広がりつつある。特に福祉施設による「アート」や「ものづくり」の展開が目ざましく、ものづくりを介した移動や新たな空間構築が生じている。雑貨等の「ものづくり」や「アート活動」は作業空間を構築する上で非常に適した形態であり、広い作業空間がなくても行うことが可能なので小規模の通所型施設のような小さな空間にも適しているといえる。そして最近では従来の施設の作業空間とは異なった、美的にデザインされたアトリエのような施設空間も増えている。また近年では施設でつくられた作品が展覧会に出品される機会も増え、作品や展覧会を介した人びとの結びつきや移動が生じている。このような今日の福祉施設の「アート」や「ものづくり」の隆盛は一過性のものではなく、過去から続くコロニーの取り組みと深い結びつきをもつものといえる。そして福祉施設の「ものづくり」や彼ら・彼女らが作った「もの」をめぐる結びつきは、障害という社会的境界を超える一つの可能性を示すものであるといえるだろう。

＜図版＞

図版１　あざみ寮開寮当日（1953年）

（『報告書２　共に生きる』　2004年）

図版２　あざみ寮3階でミシンの学習（1955年）

（『復刊　報告書１』　2004年）

図版３　あざみ寮全景（1953年）

（『復刊　報告書１』　2004年）

図版４　あざみ寮周辺地図（1966年）

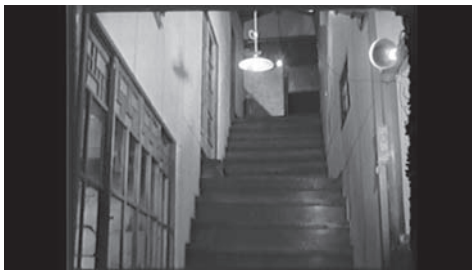
（『大津市住宅案内図　滋賀県編』　1966年）

図版５～18　（『あざみ寮・もみじ寮　今日もみんな元気です』1974年自主制作映画）

図版５　あざみ寮の生活風景（1969年）

図版６　あざみ寮の生活風景（1969年）

図版７　あざみ寮内部（1969年）

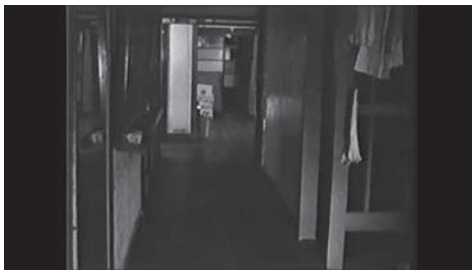


図版８　あざみ寮内部（1969年）

図版９　あざみ寮内部（1969年）

図版10　あざみ寮内部（1969年）

図版11　あざみ寮内部（1969年）



図版12　あざみ寮工房（1969年）

図版13　工房内での織物作業（1969年）

図版14　工房内での織物作業（1969年）

図版15　工房内での織物作業（1969年）

図版16　工房内での織物作業（1969年）

図版17　東京・八重洲での作品展（1969年）

図版18　東京・八重洲での作品展（1969年）

注

1）経済産業省・厚生労働省・文部科学省の３省の執筆による「製造基盤白書」が2004年版から「ものづくり白書」として毎年発行されるなど、「ものづくり」という言葉は「製造」や「生産」に替わる言葉としてイメージ戦略的に用いられ、現代社会に浸透している。近年では福祉施設においても「ものづくり」という言葉が使われ始めているが、戦前および戦後の福祉施設では使われておらず、一括りに「作業」という言葉で捉えられていたといえる。本論文では、現在の福祉施設の「ものづくり」は、日本の障害者福祉施設の歴史と深い結びつきをもつという筆者の見解より、昭和期から現在における施設での「もの」を作る作業・活動を「ものづくり」と表記する。

2）2013年には、福祉施設で作られたグッズを紹介した『福祉施設発！こんなにかわいい雑貨本』（伊藤2013）が出版され、これと関連して同年に大阪の梅田ロフトで「FREE POP EXPO」が開催されるなど、福祉施設の「ものづくり」への関心は高まりつつある。「FREE POP EXPO」のフライヤーには、「障がいを持つ“つくり手”」が作ったグッズを「工房での知られざる“ものづくり”の現場の様子とともにお届けする、ユニークな博覧会」とある。

3）昭和期の知的障害者施設における「ものづくり」は、現在のような創作的意味合いの強いものではなく、発達や職業自立のための教育・訓練を目的として「ものづくり」が位置づけられていた。

4）八幡学園児童の作品展には賛助出品として他の障害者福祉関連の２施設による作品も展示された（三頭谷2008：47）。また1943年には、障害者福祉施設（八幡学園を含む５施設）と特別

学級（２学校）における児童の絵画、刺繍、編物、「工藝」作品などを紹介した森健藏・石田博英による著書『異常児とその作品』（森・石田1943）が出版されている。

5）蜂谷によると「コロニー」という用語は、現在の日本における障害者福祉の文脈では「数百人を収容する比較的大規模で、総合的な機能を有する施設、あるいは施設群を意味するのが一般的である」が、「法的・行政的な定義はなされていない」と述べている。また、日本で「コロニーブーム」が起こる1970年前後より以前の時期では、「規模の大小、かつ目的もさまざまなコロニーが構想され、具現化されていた」、「コロニー構想を歴史的な視点から検討するにあたっては、コロニーがどのような意味合いで使われているのか留意する必要がある」（蜂谷2012：113）と指摘している。この「コロニー」という用語は、現在の福祉現場で使われることは少なく、また過去に「コロニー」と位置づけられていた施設も現在では異なる位置づけがなされている。しかし「コロニー」という用語が昭和期の福祉思想を反映する言葉であるとする見地から、本稿では当時の文脈で障害者福祉施設を示す場合は「コロニー」と記述している。

6）1950年には近江学園の隣接地に落穂寮が「重症児ばかりの分類収容のかたちで」開設されており（矢野1996：32）、1960年代には年長児問題の対策として一麦寮（1961年）、そして重症心身障害児施設としてびわこ学園（1963年）、第二びわこ学園（1966年）が設立された。

7）初代寮長は糸賀房（糸賀一雄の妻）であった。

8）この女子は一時学園で保護されたが、その後学園を出てからは行方不明となっている。この事例は、機関誌や糸賀の著書（糸賀1965）の中で変わり果てた女子の「転落」の記録として詳しく記されており、多くの学園関係者に深い傷と挫折感を与えたことで知られている。

9）精神薄弱児育成会はあざみ寮の運営にも関わっており、よってあざみ寮は「保護者協力施設」であったと糸賀は述べている（糸賀1953b：257-8）。

10）あざみ寮以外にも、1954年に管寿子が神奈川県鎌倉市の私宅を開放し、障害のある女性を対象にした自由契約施設として紅梅学園が創設されていることを三浦氏からご指摘戴いた。

11）平成26年４月１日現在のあざみの利用者数は27名（『もみじ・あざみ2014年度参考資料』2014）。

12）図版１の左上を見ると「研究所」という看板の一部分が確認できるが、当時あざみ寮では、毛糸の機械編専門の先生による一般の人達のための編物研究所があざみ寮の中に設けられていた。そこでは10人から20人の一般の人びとが編物を習っており、数名の寮生もこの中に加わって教わっていた（林1953：273）。

13）当時副寮長であった山崎浄によると、「作業指導は、開寮当初、運針、毛糸の手編みから、当時流行しはじめて毛糸の機械編み、アクセサリーの造花に熱中したこともあったが、しかしこうした仕事は生産的な仕事というよりも、めいめいの趣味や、女性としての生活の実用に役立つためのもので、片手間の仕事でしかなかった」という。そして、「彼女たちの実態に即した教育的な積み上げをするために、生産活動としての織物作業を昭和三十三年四月よりはじめた」と述べている（山崎1960：131-2）。

14）糸賀の著作集では次の記述が見られる。「民芸という世界がある。それはしばしば「げてもの趣味」と混同されるが、民芸を、その言葉どおりの意味、つまり、名もなき民の暮らしの芸術というほどに解するならば、あざみ寮の娘たちにこそ、それはふさわしいものではあるまいか。ふさわしいというのは、それを観賞する意味ではなく、そういう芸術をつくり出すという

意味においてである。げてものの観賞を民芸というのではなく、暮らしのなかに素朴な実用に耐える芸術を生み出すのである。そういう生産者として、あざみ寮の娘たちはふさわしいのではあるまいか。」（糸賀1963：53）。

15）山崎・石原によれば昭和32年の冬に外村吉之介を寮に迎えたと述べている（山崎・石原1959：45）。また石原の著書には昭和32年早春に来寮したとの記述がある（石原1984：51）。

16）あざみ寮のホームスパン作業は、羊毛を洗って草木染にし、その毛をほぐし、紡ぎ、織るといった、複数の寮生が関わった一貫作業であった（石原1984：51）。

17）清野新之助の指導のもとで全職員への10日間の講習が行われ、その後職員のみでの作業訓練期間を経て、昭和33年１月より寮生も織物作業に参加する（山崎・石原1959：45）。しかし清野新之助がその後あざみ寮とどの程度関係を持ったかは不明な点が多く、今後の課題として検討する必要がある。

18）結果的にはその後あざみ寮の織物作業が民芸として注目されることはなかったといえる。ホームスパンの権威である及川全三（1892－1985）など一部の作家から注目を得たものの、「あざみ織」を民芸と位置づけるには、クォリティの面から見ても障害のある彼女たちの技能的な限界もあって民芸作品のレベルには至らなかったと考えられる。この点に関しては今後さらに検討する必要がある。また糸賀一雄の次女・野呂（旧姓・糸賀）淑子は及川全三の内弟子（1957年～1975年の18年間住み込み）であった（菊池2013：39）。

19）1950代から60年代の「あざみ織」の中心となったのはホームスパン、木綿織、「むすび織」であった。「むすび織」はノッティングの一種で、あざみ寮では清野新之助が障害の重い人たちのために考案した機（はた）を用いたことで発展した。現在「むすび織」は多くの福祉施設にも普及し、学校でも障害児教育の教材として使われている（石原1984：60）。

20）当時保母であった石原繁野によると、この長等山荘は「昔この界隈で一番の旅館であったとも遊廓だったともいわれる」立派なものであったが、築百年はたつ古い建物であったという（石原1984：46）。

21）糸賀によると、近江学園では「昭和二十七年の二月に、桜沢如一の指導をうけて、食生活の研究をはじめた。」とある（糸賀1965：232）。

22）長等山荘は終戦前後、住友の扶桑金属の寮として使用されており、さらに1947年から51年までは、「進駐軍関係の労務者が数十人のりこんで、ある期間は不法占拠のような形で無責任に使用されて」いたため、「化物屋敷のような建物」といわれるような状態であったという（糸賀1953a：44-6、1953b：261-2）。

23）あざみ寮は近江美術刺繍工芸所所長の入谷庄太郎の寄付により1952年３月開所を目指していたが、この計画は中断され実現していない（蜂谷2012：113）。

24）また貴重な映像資料として、1960年代末から70年代前半のあざみ寮の生活の様子を撮影した自主制作映画『あざみ寮・もみじ寮　今日もみんな元気です』が人間発達研究所により現在収蔵されている。その映像から当時のあざみ寮の居住空間や織物工房の様子を知ることができる（図版５～16）。

25）糸賀によると、「あざみ寮工房」の建設資金を得るために「共同募金や社会福祉事業振興会の方面とか県当局との話合いが続きました」とあり、そして「本会評議員である伊藤貞子さんの御好意で、アメリカ駐留軍関係のカマボコ兵舎一棟の払下げが実現し、十河信二名誉会長や

東京鷺ノ宮の高橋威夫さんの御好意で、すでに三十四年十月には建築予定地の長等山の一角に分解搬入が完了しました」とある（糸賀1960：254）。また建物の建築費として約300万円が見積られていた（山崎1959：26）。

26）あざみ寮の100メートル先に大津市で一番大きな長等商店街が並んでおり、また「日赤病院が同じ町内にあり、市役所、公民館、郵便局、県庁、交番、国鉄大津駅、京阪電車の駅と、みんなの行動範囲のなかに生活に必要な機関がすべてそろって」いた。そして交通の便がいいことで来客者も多く、近江学園関係の会合場所としても頻繁に使われ、職員のための美術教室も行われていたという（石原1984：47-8、滋賀県障害者造形活動研究会2009：16）。

27）あざみ寮では大広間を使って町内会が開かれていたことで、住民との交流の場が確保されていた（石原1984：47）。

28）映画『あざみ寮・もみじ寮　今日もみんな元気です』では、周囲からあざみ寮が受け入れられ、大津の人びとと一つになるには時間がかかったと語られている。

29）寮生数がピークの時期には、「一人が畳一畳の生活で、夜は重なりあって布団を敷き、食事も遊ぶのも、ときには仕事をするにも」同じ部屋が使われ、寮生の「プライバシーはロッカーの一箱だけ」であった。「みんなが助け合い、がまんして、そのなかで役割をもち、ルールを守り生活することで」限られた居住空間での集団生活が成り立っていた（石原1984：48）。

30）1960年に精神薄弱者福祉法（現・知的障害者福祉法）が制定され「精神薄弱者援護施設」が規定された。この精神薄弱者福祉法が制定されるまで、日本では知的障害者への制度的な取り組みはなかったといえる。また、小澤は「精神薄弱者福祉法は知的障害者施設を法的に位置づけ、知的障害者に対する福祉サービスの公的な責任を認めた点で重要であった」と指摘している（小澤2006：55）。

31）1968年、あざみ寮は日本船舶振興会より補助金を得て移転新築が決定し、もみじ寮は国費と県費を得て新設決定に至る（三浦2004a：208）。

32）年表には1969年に「あざみ寮生の出身都道府県に『あざみ寮建築のための補助金申請』のお願いにまわる」とある。また同年に隣接の休耕田（一部山林を含む）3,300㎡を農場用に購入し、1971年には新たに織物工房を建設するなど職業指導のための作業空間が整備された（三浦2004a：209-210）。

33）工房設立の資金を得るためには、あざみ織という実績を社会に伝える必要があった。この点では知名度が高く、影響力のある糸賀一雄の存在は大きかったといえる。

34）この保護空間は「完全保護」を目的とするものではなく、一方で「社会復帰への基点となるような」場でもあった（社会福祉法人大木会1962：104-5）。

35）1950年代から60年代におけるコロニーへの社会的要請に関しては、コロニーが「保護」や「職業自立」の場としてのみ求められていたのではなく、学校の代替機関である「教育」の場として、また重度の障害のある人びとの「療育」の場として、そして依然として「隔離」の場としてコロニーが社会から求められていた。

36）長年あざみ寮の織物作業に関わってきた石原は、織物作業に関する事例を報告書にまとめており、そこでは寮生たちが織物作業を遊びとして関わっていた初期の頃から仕事として認識されるまでの様子が詳細に記されている（山崎・石原1959、石原1960、1963）。

＜参考文献＞

石原繁野（1960）「織物作業をとおしての人格形成（二）」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，51-60，（2004）.

石原繁野（1963）「織物作業をとおしての人格形成（三）」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，60-71，（2004）.

石原繁野（1984）『あざみ織』サンブライト出版.

伊藤幸子・太田明日香編著（2013）『福祉施設発！こんなにかわいい雑貨本：スローでゆかいなものづくりの魅力満載!!』西日本出版社.

糸賀一雄（因幡一碧）（1950）「精神薄弱児の運命」『近江学園年報』第２号，近江学園，140-148.

糸賀一雄（1953a）「あざみ寮要覧」『糸賀一雄著作集Ⅱ』日本放送出版協会，227-233，（1982）.

糸賀一雄（1953b）「あざみ寮の記」『近江学園年報』第５号，近江学園，260-270.

糸賀一雄（1960）「大木会の歴史と将来」（『南郷』第二十号）『糸賀一雄著作集Ⅱ』日本放送出版協会，251-257，（1982）.

糸賀一雄（1963）「身につく社会性」『糸賀一雄著作集Ⅱ』日本放送出版協会，43-86，（1982）.

糸賀一雄（1965）『この子らを世の光に：近江学園二十年の願い』柏樹社.

井上正隆（2004）「あざみ寮・もみじ寮の現在」『報告書２　共に生きる　あざみ寮・もみじ寮の50年・35年』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，181-190.

『近江学園創立50周年記念誌』編集委員会（1996）「部門史」『消シテハナラヌ世ノ光　近江学園創立50周年記念誌』滋賀県立近江学園，113-142.

大内郁（2010）「昭和10年「特異児童作品展」と同時代の「能力」言説―試論」『千葉大学人文社会科学研究』（21），千葉大学大学院人文社会科学研究科，62-74.

大槻倫子（1993）「八木一夫が出会った子供たち：土・造形の原点」『八木一夫が出会った子供たち：土・造形の原点』滋賀県立陶芸の森，3-7.

大槻倫子（2009）「滋賀県内施設での作陶と信楽」『滋賀県における障害者の造形活動に関する調査研究報告書』ポーラ美術振興財団助成，71-76.

菊池直子（2013）「及川全三の人間性とホームスパン取り組みへの契機」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』15，岩手県立大学，39-44.

佐藤久夫・小澤温（2006）『第３版　障害者福祉の世界』有斐閣アルマ.

滋賀県障害者造形活動研究会（2009）「石原繁野氏からの聞き取り」『滋賀県における障害者の造形活動に関する調査研究報告書』ポーラ美術振興財団助成，16-18.

清水寛（1981）『発達保障思想の形成：障害児教育の史的探求』青木書店.

社会福祉法人大木会（1953）「寮生及び職員の移動」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，27-28，（2004）.

社会福祉法人大木会（1962）「昭和三十七年度あざみ寮年間指導計画」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，102-122，（2004）.

津曲裕次（2008a）「滝乃川学園史の研究：孤女学院期の建築計画学的検討」『人間文化研究』６，長崎純心大学・長崎純心大学短期大学部，29-48.

津曲裕次（2008b）「滝乃川学園史の研究：「白痴院」期の建築計画学的検討」『純心人文研究』

14，長崎純心大学・長崎純心大学短期大学部，1-24.
野上芳彦（1998）『シリーズ福祉に生きる５：糸賀一雄』大空社.
蜂谷俊隆（2012）「昭和20年代における糸賀一雄のコロニー構想と知的障害観」『社会福祉学』53(1)，一般社団法人日本社会福祉学会，104-116.
林滋（1953）「あざみ寮の子供たち」『近江学園年報』第５号，近江学園，270-275.
矢野隆夫（1996）「南郷時代」『消シテハナラヌ世ノ光　近江学園創立50周年記念誌』滋賀県立近江学園，30-53.
三浦了（1962）「寮生作品頒布会について」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，72-76，（2004）.
三浦了（1963）「繁ちゃんの就職をめぐって」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，97-101，（2004）.
三浦了（1996）「あざみ寮の誕生とその後」『消シテハナラヌ世ノ光　近江学園創立50周年記念誌』滋賀県立近江学園，77-79.
三浦了（2004）「あざみ寮・もみじ寮のあゆみ」『報告書２　共に生きる　あざみ寮・もみじ寮の50年・35年』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，9-25.
三浦了（2004a）「あざみ寮・もみじ寮及び関係機関の年表」『報告書２　共に生きる　あざみ寮・もみじ寮の50年・35年』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，205-213.
三頭谷鷹史（2008）『宿命の画天使たち：山下清・沼祐一・他』美学出版.
森健藏・石田博英（1943）『異常児とその作品』新紀元社.
山崎明子（2005）『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房.
山崎浄・石原繁野（1959）「織物作業をとおしての人格形成(一)」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，45-51，（2004）.
山崎浄（1959）「大木会について」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，25-26，（2004）.
山崎浄（1960）「あざみ寮の現況　―近江学園よりの委託生について―」『近江学園年報』第９号，近江学園，129-134.
山崎浄（1961）「あざみ工房への道」『復刊　報告書１：あざみ寮の開寮から十年間の記録』社会福祉法人大木会　もみじ寮・あざみ寮，125-130，（2004）.

＜地図＞
弘報社（1966）『大津市住宅案内図　滋賀県編（No4．新町名改訂版）』弘報社.

＜映像資料＞
進歩における極微の会制作（1974）『あざみ寮・もみじ寮　今日もみんな元気です』（自主制作映画），人間発達研究所収蔵.

（いいもり　けいいち　大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）